

# 大陸文化を運んだ川



熊木川へ向かう瀬風の杵旗

## 杵旗祭りの郷

9月の中島地域では、深紅の杵旗や猿田彦、鉦や太鼓のお囃子などが特徴的な祭りがいくつも行なわれる。

この特徴的な祭りは、渡来文化に影響されているといわれている。なかでも、「お熊甲祭」（毎年9月20日に開催）として知られる、国指定の重要無形民俗文化財「熊甲二十日祭の杵旗行事」が行なわれる、久麻加夫都阿良加志比古神社（中島町宮前）には、渡来文化が色濃く伝えられている。

## 阿良加志比古と藤津比古

この、久麻加夫都阿良加志比古神社の由来伝説からも大陸とのつながりをうかがうことができる。

由来伝説は、次のようなものである。久麻加夫都阿良加志比古神社の祭神、阿良加志比古と藤津比古神社（中島町藤瀬）の祭神、藤津比古の二神が、現在の地に落ち着く前、宮を建てるために海から渡ってきた。瀬風の地に上陸した二神は、矢を放ち、矢が落ちたところに宮を建てることにした。放った矢を求めて、熊木川を遡り、藤津比古の放つ

た矢は、鈍打の藤瀬に、阿良加志比古の矢は、現在の谷内の加茂原に落ち、それぞれ、その場所に宮を建てたというものである。また、その矢が落ちた場所へ向かう行程にも地名の由来となったとされる伝説などもある。

## 熊来のやら

現在の熊木川の河口付近は、整備された農地になっており、能登野菜のひとつ、能登白ねぎの畑や水田が広がっている。この河口付近は、かつて、葦が生えた泥地が広がっていたといわれる。万葉の昔、大伴家持が能登国歌として万葉集に収めた

はしたての 熊来のやらに  
新羅斧 落とし入れ わし  
かけてかけて な泣かしそね  
浮き出づるやと見む わし

万葉集巻16（3878）

という歌のでてくる「やら」は、沼沢または泥海のような所をいうとされていることから、その様子をうかがうことができる。

大伴家持も、越中国守として能登を巡行したとき、熊木川を遡ったのであろう。この川は、交通の要であった。また、この歌にある「新羅斧」は、その名から朝鮮半島に由来する斧とされ、大陸とのつながりがうかがえる。渡来人もこの川を遡って来たのであろうか。

## 熊木郷

しばらく川沿いを上流へ進み、のと鉄道の鉄橋を超えた辺りから川沿いに家屋の姿が見えるようになる。この後、しばらく川は市街地の横を流れるようになる。

また、この辺りから500mほど上流にかけての区間は、春にはイサザ漁が行なわれている。

天平20年(748)の春に、この地を訪れた家持もイサザを食したのだろうか。



イサザ漁の仕掛け

熊木川の中下流域近郊には、多くの遺跡があることが

ら、古くから人々が暮らしていたことがうかがえる。河口から船で上ってきた国守一行も、この中下流域にあった船着き場に到着したのであろう。

熊来の人々は、歓迎の宴を開いたはずである。熊来の酒屋で酒を盗んでしかられている男をからかっている

はしたての 熊来酒屋に

まぬらる奴 こゝろ わし

さすひ立て 幸て来なましを

まぬらる奴 わし

万葉集巻16(3879)

の歌は歓迎の宴で家持が耳にしたものであろうか。

中流にかかる、赤い欄干が特徴的な天神橋は、かつて熊来郷の中心地であり、陸上および海上交通の拠点であった。



天神橋

## 久麻加夫都阿良加志比古神社

さらに川を上流に進んでいくと上町橋辺りから川幅が狭くなっていく。貝田橋を過ぎると川岸は家屋から、田と森へと姿を変える。加茂橋の手前に広がる広場が、「お熊甲祭」の舞台のひとつ加茂原である。

加茂原は「早回り」や「島田くずし」と呼ばれる祭の妙技が披露される場所である。



加茂原での「島田くずし」

加茂原を越えてしばらく進むと、祭り会館、久麻加夫都橋につく、どちらも「お熊甲祭」をテーマにしたものである。杵旗をデザインした街灯が並ぶ道路を進むと久麻加夫都阿良加志比古神社へと着いた。

久麻加夫都阿良加志比古神

社には、国指定の重要文化財(彫刻)となっている御神体がある。この御神体は、平安後期(12世紀)に制作されたと考えられるもので、朝鮮風の姿をしている。



久麻加夫都阿良加志比古神社の御神体  
木造久麻加夫都阿良加志比古神坐像

また、この神社には、都奴が阿良斯止という祭神も祀られている。この都奴加阿良斯止は朝鮮半島にあった国の王子で、敦賀に上陸し、敦賀の地名の由来となったともいわれる渡来人である。このことから、かつて熊来郷と呼ばれたこの地は熊木川を玄関口として、大陸へと開けた地であったことがうかがえる。

熊木川は、大陸文化と万葉の香りを静かに伝えている。

## 周辺マップ

